

大豆の収穫と連作対策について

1. 収穫・乾燥

[収穫期の目安]

白大豆: 10月下旬～11月上旬頃

黒大豆: 11月下旬～12月中旬頃

[ビーンハーベスタによる収穫]

収穫適期: 茎葉が黄変し、莢が褐色になった頃で、振るとカラカラ音がする頃で、子実水分は20%前後です。

作業時刻: 莢水分が低いと裂莢によるロスが多くなるため、水分含量が低くなる日中の作業は避けましょう。

予備乾燥: 収穫した後、島立て、架干しなどで予備乾燥を行いますが、この時降雨に合うと紫斑粒、カビ粒が発生しやすいので注意が必要です。一方、過乾燥になると割れ粒が発生します。

脱粒: 予備乾燥したものをスレッシャーなどで脱粒します。子実水分が16～17%で、子実に爪を立てると爪痕が少し残る頃です。

仕上げ乾燥: 脱粒後、子実水分15%を目標に、平型乾燥機等で仕上げ乾燥を行います。高水分の子実を乾燥すると、条件によってはしわ粒、皮切れ粒が発生するため、脱粒後18%を超えるような場合は、送風から開始します。送風温度は30℃以下で、外気温より15℃以上高くないよう注意しましょう。

[コンバインによる収穫]

収穫適期: ビーンハーベスタによる収穫適期より1週間程度遅く、茎がポキッと折れる頃が適期です。子実水分は18%程度です。

作業時刻: 朝夕の露がない、晴天の日の午前11時頃から午後5時頃が最適です。

その他注意: 茎や莢の水分が高かったり、雑草が混入すると、汚損粒が発生しやすいため、事前に雑草や熟期の遅れた個体を除去する必要があります。

乾燥: 収穫後なるべく速やかに乾燥します。乾燥法はビーンハーベスタと同様です。

2. 連作対策としての土づくり

大豆栽培では、しばしば連作障害が問題となり、特に黒大豆では、大粒かつ多収を得ようとすれ

ば、高い地力が要求されます。ブロックローテーションにおいても何巡目かになると収量が低下することが指摘されています。白大豆においても連作による収量品質の低下は深刻な問題です。やむを得ず連作する場合は、少しでも作柄を安定させるため、堆肥 1～2t/10a 程度を播種 1ヶ月前までに施用し、深耕することが望ましいでしょう。また、排水対策も徹底することが重要です。

3. 連作による病害の発生と対策

連作田では、黒大豆に茎疫病、黒根腐病の土壌伝染性病害が発生し株が枯れることがあります。このような場合は、連作は出来るだけ避け、やむを得ず連作する場合は排水対策や土づくりを徹底する必要があります。

○「黒根腐病」

土壌伝染性の立枯性病害で、開花期から生育後期以降に発病します。菌核の土壌中での寿命は長く、症状は地際部が暗褐色に腐敗、その上に白い分生孢子やオレンジ色の子のう核が生じます。細い根が極めて少なくなり、根がもろく折れやすくなるため、株は簡単に抜けるようになり、下葉から枯れ上がってきます。排水の悪い連作した転換畑で発生が多く、生育前期が多雨で、開花期以降が高温・乾燥する場合に発生が多くなります。

【対策】

- ① 連作を避ける
- ② 排水対策や土づくりを徹底する
- ③ 被害株は早期に除去する
- ④ 大豆に登録された有効な薬剤がない

○「茎疫病」

土壌伝染性(土壌中の卵孢子)の立枯性病害です。全生育期間にわたって発病し、地際の茎・根部に紡錘状の水浸状病斑を生じさせます。その後、茶褐色の大型病斑となり茎の周囲全体が冒され、根も激しく褐変し、枯死することもしばしばあります。排水の悪い連作転換畑で発生が多く、灌水が発病を助長することがあります。

【対策】

黒根腐病と同じ

[\(戻る\)](#)